

書評

鈴木千枝子 『日本海が見える公園』、路の会、2000 円

西山教行(経済学部)

この詩集の著者は、五十嵐キャンパスにほど近いカトリック修道院に暮らす修道女である。修道院といえば、世間から隔絶された空間に、世俗を超越した人々が集い、現代詩の世界とは無縁だと思われるかもしれない。しかし、著者は宗教生活を現代詩という場において追究する可能性を探り、わたしたちのところにポエジーの輝きをともすことに成功した。

この詩集全体を貫く問題意識は「私とは誰か」という点につきる。このような関心から、著者は修道会への入会を決意した時より現在にいたる歩みを振り返るが、これは履歴を編んだ自伝というよりも内面の記録であり、還暦を迎えたひとりの女性がいかに誠実に、おのれの心に向かい合うことができるかを証するものだ。

詩集は三部から構成されている。第一部では、修道院への入会の決意から、その後の「塀の中」での暮らしなどを振り返ったもので、なかでも詩集の題名となった「日本海が見える公園」は寺尾中央公園に着想を得た作品であり、日々の暮らしに生きるポエジーのありかをあらわしている。第二部は、新潟に着任以来、四季こもごもの出会いのなかから紡いだことばの数々。第三部では、現在の著者が年老いた両親とどのように関わっているのか、だれにでも訪れる人間の老いを見つめた作品から構成されており、両親への敬愛を飾らぬことばのうちに深めている。

現代詩が晦渋の小径をすすむなかで、著者の編み出すポエジーは平明さのみ強調されるかもしれない。しかし、心の軌跡を丹念に、しかも奇をてらうことなく、澄み切った言葉づかいにより描き出すことは、「修行」の名に値するだろう。この「修行」とは、ポエジーの探求が自己の探求でもあり、また「あなたのもと」への歩みともなることを確信した者の業であり、このころの旅の困難さと美しさを感じさせてやまないものだ。

(購入に関しては、路の会、187-0043 小平市学園東町 53-41 越路美代子方、あるいは著者まで 950-2101 五十嵐 1 の町 6370 ナミュール・ノートルダム修道院鈴木千枝子まで)

ミュリエル・ジョリヴェ＝著、鳥取絹子＝訳、『フランス 新・男と女 幸福探し、これからのかたち』、(平凡社新書 122)、740 円

本書の題名を見て、ただちにかつての『男と女』に思いを寄せた方はいるだろうか。クロード・ルルーシュ監督が『男と女』のなかで、伴侶と死別した子連れの男女の出会いとその「幸福探し」をせつないまでのメロディにのせて描いたのは1965年のこと。その後フランスは1968年の五月革命により、大学といった社会制度だけでなく、家族や性をめぐる世界観にも大きな変革を与え、男と女の関わりは大きく変化をとげた。1965年では子連れの子の恋愛は、幾分の恥じらいとためらいを含んでいたが、5月革命による社会の「解放」は、男女関係に加速度を与えてしまったのかもしれない。アヌーク・エメとジャン＝ルイ・トランティニアンが演じた『男と女』の世界は、もはやどこにでもある日常の一コマとなってしまった。

フランス人の中では、結婚の40%が離婚という結末をたどり、出生数での婚外子の割合は40%に達しようとしている。1999年にはパックス（市民連帯契約法案）が可決し、ホモセクシュアルのカップルなど、「異性とでも同性とでも、共同生活をする二人の成人の結ぶ契約」（フランス法務省によるパックスの定義）が法的に認められることとなった。もとより、「コアビタシオン」（同棲）はごく一般的な生活のスタイルとなっているし、「モザイク家族」の名の下に、それぞれが前夫（妻）との間の子供をつれて新たに家族をつくり、その二人の子供が生まれ、家族を増やすといったことも珍しいことではない。家族を取り巻くフランス社会はおよそ日本社会の対極を歩んでいるのではないかと疑ってしまうほどだ。

日本人のまなざしからすると、フランスは「家族」の崩壊した国とも、モラルなき社会とも映るかもしれない。しかし、フランス人は家族の価値を深く認め、そこに幸福を追求するがゆえに、一度限りの婚姻関係に究極の愛の姿を見いだすことができずに、悶々とした日々を過ごしていると、著者はさまざまな調査を通じて訴えているようだ。

そこで、本書の描き出すフランス人の男女観や人生観、職業観を鏡として、自分たちの姿を映しだした時、わたしたちは自分たちをどのように見つめ直すことができるだろうか。